

聖書日課 『からし種』 2025.1.19-1.26

<p>1月19日 (日) ハバクク 4章</p>	<p>「あなたは人間を海の魚のように／治める者もない、這うもののようにされました」(14節)。預言者はどこかの海辺で、網に集められる魚たちを眺めながら、苦難の民の姿をそこに重ねていたのだろうか。ガリラヤの海辺に立ったイエスの「人間をとる漁師にしよう」(マタイ4:19)の招きにより、海の魚のたとえは救いに集められる幸いのたとえに変えられた。</p>
<p>20日 (月) ハバクク 2章</p>	<p>「定められた時のために／もうひとつの幻があるからだ。それは終わりの時に向かって急ぐ。人を欺くことはない」(3節)。旧約で「定められた時」「終わりの時」とは、主の激しい怒りによって世界が滅ぼされる恐ろしい幻。では、その時のために急ぐ「もうひとつの幻」とは、もしや救い主キリストのことでは？「希望はわたしたちを欺くことはありません」(ローマ5:5)</p>
<p>21日 (火) ハバクク 3章</p>	<p>「しかし、わたしは主によって喜び／わが救いの神のゆえに踊る」(18節)。「いちじくの木に花は咲かず...」(17節)と悲痛に記される荒廃は今も実際に起きていること。その中で私たちは主によって喜ぶのか？しかし本章は「指揮者によって、伴奏付き」(19節)の会衆の歌。互いの信仰に助けられ困難に向き合うようにと集められた主の教会に人々を招きたい。</p>
<p>22日 (水) ゼファニヤ 1章</p>	<p>「わたしは、人も獣も取り去り/空の鳥も海の魚も取り去る」(3節)。「わたしはこれらを造ったことを後悔する」(創世記6:7)。聖書の神は「苦悩する神」だと言った人がいる。私たちの罪を悲しまれ、共に生きようと造られた生き物たちまでも含めて取り去ろうかと思ひ悩む神。しかし、愛する独り子を敢えて十字架で死なせる「苦悩を忍ばれる神」でもあると思う。</p>

聖書日課 『からし種』 2025.1.19-1.26

<p>23日 (木) ゼファニヤ 2章</p>	<p>「主を求めよ。主の裁きを行い、苦しみに耐えてきた/この地のすべての人々よ/恵みの業を求めよ、苦しみに耐えることを求めよ」(3節)。主の御心に従うゆえに苦しみを受ける人々がいる。それは、御自身が「苦悩する神」である主に最も良く知られているはず。苦しみに耐える力を給わる恵みの業があるように。「最後まで耐え忍ぶ者は救われる」(マルコ13:13)</p>
<p>24日 (金) ゼファニヤ 3章</p>	<p>「わたしはお前の中に/苦しめられ、卑しめられた民を残す。彼らは主の名を避け所とする」(12節)。主の御心は、苦しみと卑しめを受けている民の上であり、主の名を避け所とする民をその住む地に残されることにあると知る。「わたしはお前のうちから/勝ち誇る兵士を追い払う」(11節)。聖書が「今」、「誰」に対して語っているのか、注意深く読んでいきたい。</p>
<p>25日 (土) ハガイ 1章</p>	<p>「主の使者ハガイは、主の派遣に従い、民に告げて言った。『わたしはあなたたちと共にいる、と主は言われる』」(13節)。聖書の中でもこの御言葉はとりわけ私たちの霊を奮い立たせるように思う。インマヌエルの主として世に生まれてくださったイエスは、復活された後も「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる(マタイ28:20)」とってください。</p>
<p>26日 (日) ハガイ 2章</p>	<p>「国の民は皆、勇気を出せ、と主は言われる」(4節)、「わたしの霊はお前たちの中にとどまっている。恐れてはならない」(5節)。バビロン帰還後の神殿再建は困難を極め、神殿の基礎が据えられた後も妨害のため二十年も中断されたという。心折れる状況下をハガイは御言葉で励まし続けた。神殿を建てるのは私たちの力ではなく、主ご自身の霊の働きなのだ、と。</p>